The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ニューレフトと呼ばれたモダニストたち : 1950 年代の国際情勢とイギリスの「文化・政治」動向
Author(s)	山田, 雄三
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2007, 2006, p. 41-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77331
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ニューレフトと呼ばれたモダニストたち

——1950年代の国際情勢とイギリスの「文化・政治」動向——

山田　雄三

1．1950年代の国際情勢

「最初のニューレフトは1956年に誕生した」と、スチュアート・ホールは言う。[1] この年の11月4日、ソ連の戦車がプラハ市街に侵攻したというニュースが伝えられたちょうど同じとき、イギリスとフランスはスエズ運河地帯を占領し、国際世論の非難の雨を浴びていた。確かに、この2つの事件が引き金となって、59年の『ニューレフト・レヴュー』創刊に至るいくつかの動向、例えば共産党内部の分裂、学生たちの同人誌出版やレフトブッククラブの討論会が顕著になる。しかし、1956という数字にスポットを当てる歴史神話は、分かりやすくはあっても不十分な記述にしかならないだろう。ソ連のプラハ侵攻をきっかけにして、「東側」も領土侵害を行うし、そのやり方は帝国主義と何ら変わらないことを世界は認識したが、それが初めての出来事ではなかった。53年6月に東ドイツで起こった反乱鎮圧のとき、ソ連は軍事介入の方針をすでに示していた。それ以外にも、スターリンの死去とフルシチョフ発言、東西外交努力によるデタントへの期待と幻滅、イギリス独自の核開発への批判、キプロスおよびケニア統治をめぐる論争など、50年代には実にさまざまな亀裂が生じている。私たちは「冷戦構造」ということばを使うが、49年の北大西洋条約締結でかたちとなった構造は50年代を通して亀裂とその修復、さらに新たな亀裂といったプロセスでもあったことを思い出す必要がある。

個々の亀裂が生じるたびに構造そのものを解体しようとするレフトの試みは、局所的に行われてきた。例えば、56年10月のハンガリー動乱を受けて、E. P. トムソンやエリック・ホブズボームら共産党系歴史家たちは、ソ連型社会主義からの離脱を主張する『リーズナー』誌を発行していた。このジャーナルの刊行が共産党の党紀に違反するか否かの論争の末、共産党は分裂することになる。概して、こうした革新運動はマイノリティの活動にすぎなかった。ところが、さまざまなマイノリティの不満の呟きが重なって、大きな怒りの声になるかにみえた時期が到来する。それが、1957年から60年代初頭にかけてのニューレフト現象だと呼んでいいかもしれない。象徴的な出来事は、1958年4月の反核キャンペーン「オルダーマストン行進」である。幾千という市民が参加したこの出来事に、ニュー

[1] Stuart Hall, 'The "First" New Left: Life and Times,' in *Out of Apathy: Voices of the New Left Thirty Years On*, ed. Robin Archer (London: Verso, 1989), p. 11.

レフトたちは多義的な意味での「第3の勢力」形成を期待したのだ。ひとつに「西」でも「東」でもない中立陣営を、ひとつにフェイビアン型労働党でもコミンテルンの共産党でもない社会主義勢力を、それでいて政治と文化が分けられない、スキッフルを演奏しテッド・ボーイのファッションをすることも政治になるポリティクスを想像したわけである。

2. オルタナティヴな構造のために

ところが、この現象は、人道主義というモラルのレベルや、「怒れる若者たち」の感情的暴発といったレベルで解釈され、政治のレベルで捉えられることは少ない。しかし、ニューレフトの側から具体的な提言もなされていた。レイモンド・ウィリアムズは4年毎の総選挙では、個々のクリティカルな状況にあって国民の選択が反映されないことから、短いスパンでの総選挙を提言したし、トムソンも補欠選挙の実施を求めた。それにもかかわらず、彼らのことばは、いわゆる政治のことばに翻訳されて、実行力をもつには至らなかった。その原因は特定できない。ひとつにローカルな地盤に軸足を置くことへのこだわりがあった。スエズやキプロス派兵に反対するのも、過剰な軍事予算のために教育や住宅の整備に回す予算がなくなるからという本音も見え隠れした。また、経験主義のイギリスならではの抽象化や理論化へのためらいがあった。『ユニヴァーシティズ&レフト・レヴュー』の創刊文はこう謳っている。「このジャーナルは政治的な方針を提供したりしない。それはできない話だ。社会主義の議論を展開してきたさまざまな伝統が自由に出会い、開かれた論争を行うフォーラムを提供したいからだ。狭量なセクト主義を超えて、新しいアイデアや書き手を募ってゆきたい」。[2] さらに、後に批判されるポピュリズムの傾向が強かった。イートンから国会議員へ、そうでなければ外交官へというエリート政治とは違う政治を考えたかったわけだ。ホールは言う。「要するに、スキッフルに夢中な連中と政治を語る連中とのあいだに乗り越えられない溝などあるはずはないということだ。今日、両者は対立してはおらず、お互いを補い合っている」と。[3]

このようにニューレフト現象は、国際情勢に触発されて生まれながらも、どこか内向的である。それも無理はなかった。50年代のイギリスは、国際秩序を導く位置にあるという自負、30年代の大義を喪失していた。『怒りを込めて振り返れ』の主役、ジミー・ポーターの毒々しい台詞は、社会に蔓延する「政治的無気力(アパシー)」の演劇的表現でもあった。新しい民主社会を担うはずの労働党は国内では中央集権的な官僚制を強め、国際問題では「東西両陣営」のロジックに巻き込まれていた。国民は消費者になる以外に(そして、消費という名目で搾取される以外に)、何もすることがないようだった。だからこそ、トムソンは共産党を離党後に創刊した『ニューリーズナー』で、「社会主義ヒューマニズム」を連呼したわけだ。「社会主義ヒューマニズムは、もう一度、生身の人間を社会史と社会の展望の中心に据える点で、ヒューマニズムなのだ。スターリン主義には欠かせなかった大げさ

---

[2] 'Editorial,' *Universities and Left Review* Vol. 1, No. 1 (1957), p. ii
[3] Stuart Hall, 'Politics of Adolescence?,' *Universities and Left Review* Vol. 4, No. 6 (1959), p. 4

な抽象概念、例えば指導政党やマルクス・レーニン・スターリン主義や東西両陣営や前衛など、やかましい抽象論を後生大事にはけっしてしない」。[4] 50 年代の政治的無気力を超えて、イギリス国民が世界の歴史を形成する主体になるにはどうすべきか。それがニューレフトの最優先課題となる。

そんななか、ニューレフトは「東西両陣営」という構造にたいしてオルタナティヴな構造を主体的に立ち上げる戦略を練り始める。一方に、脱スターリン主義の闘争を繰り広げる東欧共産国への関心があった。世界に先駆けて資本主義の生産様式を作り出したイギリスには、それへの批判的な反応を蓄積してきた。オーウェンの空想社会主義しかり、モリスのギルド協同主義しかりである。こうしたイギリス独自の社会主義を見直すことで、スターリン主義を修正しようとしているプラハやベオグラードと協同体勢が取れるはずだと考えた。他方に、脱植民地化を果たし、いわゆる「第 3 世界」として存在感を強めていたアジア・アフリカとの関係形成が考えられた。帝国的統治の困難と不毛さをヨーロッパのどの国よりも知っている旧宗主国だからこそ、「第 3 世界」との新しい関係を形成する格好の位置にあると考えたわけだ。トムソンは言う。「植民地やアジアの民族の展望について国民に理解を深めるよう促すと同時に、東欧の修正論者たちの潜在的な力と共産主義国家内部で胎動しつつある民主的な力もまた国民によく知ってもらって、私たちイギリス国民こそ世界情勢の鍵となる位置にいることを自覚するよう努めなければならない」。[5] また、次のようなことばで「政治的無関心」にとらわれた国民にエンパワーを図っている。「どの点を考慮してもこう思えて仕方ない。トランプの山にも似た狂気の軍事力システムを先頭切って解体する国として、イギリスほどふさわしい国はない。壊滅的な核兵器という点でなく世界への影響力という点で、私たちはいまだ列強の力をもっている。私たちとインドとの絆は強く、積極的に共存のあり方を求めているアジアとヨーロッパを結び付けるだろう。私たちの労働運動は分裂していないので、西であれ東であれ全ヨーロッパの人々にアピールするいい位置にある」。[6] こう言っていいかもしれない。ニューレフトは、産業革命や帝国主義の経験、つまりイギリス社会文化のレジジュアルな要素を冷戦構造社会に差し挟むという戦略を取ったのだと。それがニューレフトの戦略だったとするならば、「30 年代のモダニズム」に関して彼らが展開した議論もまた、グローバルな議論に発展する芽をもっていた。そのことを後で詳しく見てみたい。

3.『コンヴィクション』というフォーラム

先走って結論を述べるが、ニューレフト運動はモダニズムの系譜に属している。物理的な移動の程度・頻度の高まりのなかから生まれてきたからだ。ニューレフト運動の象徴『ニ

---

[4] E. P. Thompson, 'Socialist Humanism—And Epistle to the Philistines,' *New Reasoner* Vol. 1, No. 1 (1957), p. 109.
[5] E. P. Thompson, 'The New Left,' *New Reasoner* (Summer 1959), p. 8.
[6] E. P. Thompson, 'Neutralism and Survival,' *New Reasoner* 4 (1958), p. 50.

ューレフト・レヴュー』は1959年に創刊されるが、一般にこの現象は1957年から刊行されてきた『ユニヴァーシティズ&レフト・レヴュー』と『ニューリーズナー』との合併として理解される。前者は、オクスフォードやロンドンのリベラルな学生たちが中心となって創刊した文芸評論誌であり、労働者階級出身の「スカラシップ・ボーイズ」や公務員、移民や若者の支持を得て、最盛期には8,000部を刷っていた。後者はイングランド北部に拠点を置き、最盛期でも3,000部と購読層は小さかったものの、脱共産党系の新しい社会評論誌として活発な討論を行っていた。そのため、この合併に関しては、南北の統合であるとか、レフトの世代間架橋であるといった国内的神話化がなされることが多かった。

しかし、この両ジャーナルの統合を国際的な視点から見たらどうなるだろうか。『ニューリーズナー』の場合、国際的なマルクス主義に鈍感であった共産党への反発から生まれた経緯もあり、大陸の修正マルクス主義を多く取り入れていた。主宰のトムソンは自身、ユーゴスラビアでの鉄道敷設にボランティア参加した経験から、東欧とイギリスの連携の可能性を探っていたし、この時期すでにクリストファ・ヒルによってグラムシの再評価も行われていた。『ユニヴァーシティズ&レフト・レヴュー』の場合、こちらはまさしくモダニスト集団であった。ホール自身がそれを認めている。「『レヴュー』は「リーズナー」派が考えたとおりコスモポリタンであって、オクスフォードとロンドンに軸足を置いていた。（中略）私たちのグループは、根無し草のコスモポリタンではなかったにしても、モダニストであった。私自身、植民地出身ということもあって、社会的に匿名性の強いメトロポリスの文化のほうが居心地よかった」。[7] アプローチの違いはあるとは言え、双方のジャーナルとも「政治的無関心」を乗り越えるためには新しい国際関係を構築する以外にはないと考えていた点で、すでに連携の素地をもっていたわけだ。

確かに、2つのジャーナルの合併は象徴的な出来事ではあったが、ニューレフトと呼ばれる社会現象はそれだけではなかった。ウィリアムズは自ら編集した『コンヴィクション』という論集が、1959年に出版されたことを強調している。「3番目の本が出ることで、いくらか視界が明るくなった。この『コンヴィクション』はさまざまな領域の人々が書き手となった論集だった。ホガートと私はページをめくるごとに、労働党の若い社会学者や経済学者たちに引き込まれていき、(中略)しまいには1つのグループになったような気がした」。[8]ウィリアムズのことばどおり、経済、文学、科学、哲学などさまざまな領域のレフトたちが一堂に会して、それぞれの立場から新しい国際関係を提言している点で、この論集は興味深い。例えば、科学者で後に『ニューサイエンティスト』誌の主幹となるナイジェル・コールダーがいた。東西両陣営が宇宙計画でしのぎを削るなか、科学者はモラルとしてユネスコを中心にこの種の研究は推し進めるべきで、月面到着の暁には、星条旗でもハンマ

---

[7] 'The "First" New Left: Life and Times,' p. 23.

[8] Raymond Williams, 'The New British Left,' *Partisan Review* 27 (1960), pp. 341-347, cited from *Border Country: Raymond Williams in Adult Education*, ed. John McIlroy and Sallie Westwood (Leicester: NIACE, 1993), p. 130.

ーと鎌でもなく国連旗を掲げようと訴えている。[9] また、稀代の俊才、アイリス・マードックがいた。彼女は哲学者としての立場から、政治判断は経験に基づくしかないというイギリスの因襲を破って、「政治判断が行われる際の根本的な論理形式」を突き止める、つまり政治判断を理論化する作業の必要性を説いた。[10] それを通して、現実に行われている日和見的な政治判断や妥協の急所を突こうと考えたわけだ。

国際政治という観点で見ると、マクミラン政権下で外交官として働いたヒュー・トマスのエッセイ「外務省のドアの外へ」は、外交の裏舞台を暴露していて刺激的であった。[11] デタント時代の 1955 年から 56 年。ロンドンを主な開催地として東西両陣営の軍縮小委員会が 64 回にわたって開かれていた。そのなかで 1955 年 5 月 10 日と 56 年 3 月 27 日の 2 回、ソ連は軍縮交渉と査察の受け入れ、ハンガリーからの撤退などを盛り込んだ画期的な提案をする。それにたいしてイギリス政府側は、軍縮問題を凍結させておきたいペンタゴンの意向を汲み取り、ソ連の提案に核兵器が含まれていないことを理由として、提案を突き返す。この内幕を見てきたトマスは、憤慨を込めて書いている。「この 2 つのプランがもし実行に移されていたなら、東欧の歴史はまったく違ったものになっていただろう。流されたハンガリー国民の血の代償は、これらの文書を拒んだ者たちもまた払わなければならないのだ」と。[12] そして 50 年代の外務省の失策を振り返って、当時の外交は軍事的思考をコントロールし、導くものではなく、軍事的思考をそのまま反映したものだったと述べ、外交が軍事的戦略に従属する関係を批判している。こうした軍事力決定論から抜け出すためには、軍事に特化された国際関係ではなく、芸術、スポーツ、健康や環境の問題などあらゆる面における複合的な国際協力関係を構築する必要があると、トマスは提言している。[13] 理想に偏りすぎる向きもあるが、こうした提言は、当時、再評価されつつあったグラムシの市民社会論や陣地戦の発想とも通底していたように思える。デタントでトマスが分かったことは、東西両陣営ともに冷戦構造を固定化することしか考えていないということだった。外交交渉の力を信じていたこの若い外交官は外務省を去ることを決意するが、次のことばは今日の国際情勢にも妥当する洞察を含んでいる。「当たり前のことかもしれないが、世界を黒と白にいったん分けてしまえば、どうやったところで黒との最終合意に至ることはないことが分かるだろう」。[14]

4．オーウェルを乗り越えて『鯨の外へ』

イギリスの 50 年代は 30 年代とよく比較される。有り体に言えば、発言し、行動する大

---

[9] Norman MacKenzie (ed.), *Conviction* (New York: Monthly Reviews Press, 1959), p. 152.
[10] *Conviction*, p. 224.
[11] スペイン内乱史やキューバ史の研究家として後に知られることになるヒュー・トマスは、80 年代にサッチャーの外交政策顧問となる。この頃のニューレフトが 80 年代にサッチャー政権に取り込まれる現象については、別に考察する必要があるだろう。
[12] *Conviction*, p. 163.
[13] *Ibid.*, p. 170
[14] *Ibid.*, p. 165.

義があった時代とそれを完全に喪失してしまった時代との好対照となっているからだ。その点で考えると、大義のために立ち上がり、そのこと一切に幻滅するプロセスを生きた人間として、ジョージ・オーウェルが重要になってくる。実際ウィリアムズは、「50年代のイギリスでは、どのルートを選んだとしても、オーウェルという人間が待ち受けていた」と述懐している。[15] 確かに、そうだったのだろう。ポピュラー・カルチャーを分析したいと思えば、さまざまなメディアを駆使し、あれほど多くの読者やリスナーの心を掴んだオーウェルがいた。日常の文化を観察したいと思えば、オーウェルのルポがあった。社会主義の理念をもう一度復活させようとすると、オーウェルが釘を刺した。『動物農場』ほかオーウェル晩年の著作は冷戦構造化の忌むべきプロパガンダであって、ニューレフトはそれと対決しなければならなかったという解釈は、一面的には正しい。しかし、彼らによるオーウェルへの反論の仕方はオーウェルのたどった軌跡を意識したものだったし、30年代のオーウェルのスタイルに著しく似ている。その点を見てみたい。

まずは、ニューレフトが40年代のオーウェルの著作にどのように反応したかという点から。トムソンにしてもホールにしても、50年代の無気力な感情構造には40年代のオーウェルのことばが深く関わっていることを自覚していた。とりわけ40年に発表された『鯨のなかに』をしばしば取り上げている。オーウェルはこのエッセイのなかで、もの書く知識人がイズムにコミットする愚行を批判して、こう書いていた。「鯨のなかに入るのだ。いやむしろ、もうすでに鯨のなかにいることを認めるのだ。（実際、そうなのだから。）世界のプロセスに身を委ね、それに抗うことも、それを動かしたつもりになるのもよすがいい。そのプロセスを黙って受け入れ、それに耐え、記録するのだ」。[16] さて、トムソンは1960年に「鯨の外に」という題のエッセイを発表するが、そのスタイルはオーウェルにたいする意趣返しになっている。「1949年前後のいつのころかに、この道に沿って冷戦の海を、現実のNATO世界という鯨が泳ぎだした。その小さな目のなかにいやしげな物思いの様子をたたえて、転向した人々が水しぶきを上げてもがくのを見つめてから、やおら鯨はあごを開いて呑み下した。（中略）われわれは鯨の外に出なければならない。スターリン主義とNATO主義とのどちらの鯨からも外に出なければならない」。[17] これだけでは、単なるアジテート文にしか読めないかもしれないが、トムソンは鯨の外に出ることの困難も認めている。30年代の知識人が世界を見回したとき、富を再分配し、より平等な国際関係を築かなければいけないと立ち上がりながらも、同時に西欧文明の諸価値を裏書してしまったと、トムソンは分析する。そして、このホブソンの選択をオーウェルのジレンマと呼んだのだった。ホールもまた、「またもや鯨のなかに」というエッセイを書いている。そこで

---

[15] Raymond Williams, *Politics and Letters: Interview with New Left Review* (London: NLB, 1979), p. 384.

[16] *George Orwell The Works*, ed. Sonia Orwell and Ian Angus, vol. 10 (London: Secker & Warburg, 1996), p. 526.

[17] 『新しい左翼--政治的無関心からの脱出--』、E. P. トムスン編、福田歓一ほか訳（東京：岩波書店、1963年）、171-195ページ

は、オーウェルが最終的に行き着いた結論は拒絶しなければならないが、『鯨のなかに』が書かれたそもそもの動機に立ち返るよう、読者を促している。彼は言う。「オーウェルのテーマは、「国家統制の時代にあって書き手がどこに立つか、その位置取り」であった。（中略）右であれ左であれ正統主義が出てくること、書き手はいともたやすく政党マシーンに身を任してしまうことを、オーウェルは正しく気づかせてくれた」。[18] トムソンとホールと、そのいずれもが国際社会のなかでの書き手の位置を問題にし、30年代のオーウェルをその問題の基点に置いている。

5.「ジョージ·オーウェル」という亡霊

ジョージ·オーウェルは、遅れてきたモダニスト、エリック・ブレアが世界恐慌以降の国際情勢に生身を曝す過程で作り上げた、カッコつきの「作家」である。そのように述べたのはウィリアムズである。[19] 彼はオーウェルについてはさまざまな角度から論じているが、オーウェルをジョイスの系譜に位置づけていて面白い。オーウェルにとっては、レオポルド・ブルームというキャラクターの24時間を通して、ごくふつうの「日常」が再現されている点で、『ユリシーズ』は手本であった。このごくふつうの男の内側と外側とが記録されていたからだ。しかしながら、この20年代のモダニズム小説においては、作者とキャラクターとの、ひいては作者と世界との関係性は巧みに隠されている。世界恐慌やスペイン内乱を経験する30年代、ダブリンやロンドンの外の出来事が容赦なく侵入してきた時期、書き手は自らと世界との関係をもはや隠していられなくなる。そこにウィリアムズは、ジョイスからオーウェルへの展開を読む。

ビルマの白人社会であれウィガンの波止場であれ、カタロニアであれ、書き手はその内側に入って行かないことには、そこに生きるふつうの人々を知りようがない。しかし、そこで何かを記述するには、対象の外側に立たざるをえない。そこで、書き手はどこに立つか、その位置取りに苦しむことになる。その問題にたいする決着のつけ方のひとつが、「ジョージ·オーウェル」というペンネームをもつ作家の誕生であった。例えば、『ウィガン波止場への道』を例に取ってみよう。ウィリアムズも指摘しているが、ウィガンを訪問した際、ブレアが付けていた日記とこのルポとでは、語り口に明らかな違いがある。ペンネームの「オーウェル」は、坑夫たちの身体能力に感心しながら、長身の体を折り曲げ無様な格好で坑道を這う自らの姿を自嘲的に描き出す。また、労働者階級は臭いと自分も含め中流はやはり思い込んでいるのだと、レフトのインテリを意識した戦略的な発言をする。そして何よりも、次の一節は印象的だ。少し長くなるが引用したい。

> 作家が自分にたいする書評を引用するのはよくないことは知っている。しかしここで私のある本について『マンチェスター・ガーディアン』の書評者が述べたことに反論しておき

[18] Stuart Hall, 'Inside the Whale Again?,' *Universities and Left Review* No. 4 (Summer 1958), p. 14.
[19] Raymond Williams, *Orwell* (London: Collins, 1971)

たい。

「ウィガンかホワイトチャペルかに降り立ったオーウェル氏は、人類を完膚なきまでにそしるために、徹底的な力を発揮して、良いものすべてにたいして目をつむろうとしている。」

間違いだ。オーウェル氏（Mr. Orwell）はウィガンに「降り立った」けれども、長く滞在するつもりでそうしたのだし、ウィガンにいて、人類の悪口を言おうなどという気持ちには少しもならなかった。オーウェル氏はウィガンがとても好きになった—景色などではない、人が気に入ったのだ。[20]

これなどを読むと、ブレアがジャーナリズムをうまく利用して、信頼できるルポライター、「オーウェル氏」を作り上げていることがよく分かる。ウィリアムズのことばで言うと、「仲介に頼らず直接、現場で経験し、本当のことしか言っていない実直な人間にうまく扮している」。[21]

実は、『コンヴィクション』の寄稿者たちも、30年代のルポルタージュの手法を用いて、オーウェルのたどった20世紀を追体験している。と言うのも、『コンヴィクション』には、1950年代の国際情勢を直接、現場で体験した人たちも寄稿しているからだ。先ほど見た外交官ヒュー・トマスもその一人である。彼は、外交交渉に幻滅しながら外務省のオフィスの内側にいる感覚を、次のようなことばで表現していた。「何よりも私は自由になりたかった。ペンと口を使って、思っていることを自由に言ってみたかった。窓ガラスが割れないよう常時、シャッターを下ろしっぱなしにしているよりも、窓に投石できればなあと思っていた。大急ぎで付け加えなければいけない。そんな行為が道徳的に見ていいと言っているのではない。ただ、それが率直な気分だった」。[22] こうしたことば遣いのなかに、新米の外交官の内面と外面とを描きながら、外務省の外側と内側とを重ねて記録しようとする衝動も読み取れるだろう。

もうひとつ、印象的な記述（語り口と言ったほうがいいかもしれない）がある。ピーター・マリスによる植民地支配を批判したエッセイである。マリスは、マウマウ団による反英抵抗が激しい50年代に、ケニアの治安警察官として派遣されており、その体験だけでもオーウェルのビルマ体験を髣髴とさせる。1954年元旦の午前、反植民地政府ゲリラ掃討の任にあった彼と現地人の同僚は、ゲリラに加わっていた18歳ぐらいの青年を偶然、捕まえる。その直後、同僚は何の前触れもなしに青年を射殺する。家族思いの温厚な同僚の一瞬の変貌に、マリスは虚を突かれる。その状況は、こう描かれている。「怒りを覚えることが

[20] *George Orwell The Works*, vol. 3 (London: Secker & Warburg, 1996), p. 68.
[21] *Politics and Letters*, pp. 384-5.
[22] *Conviction*, p. 169.

できないほど、私は驚いてしまった。あまりにも予期せぬことだったので、現地のことばで怒りを表すことができなかった。それで、坂を上って行き、掃討作戦が終わった道まで出た。予想に反して、作戦自体はちょっとした成功だった」。[23] この事件それ自体は、オーウェルが1934年に発表した『ビルマの日々』にも、マクスウェルという警察官による似たような虐殺が描かれていて、珍しいものではない。ただ、マリスはこの逸話を次のように締めくくる。「事件自体には特別な意味はない。それでも、その後2年間の警察官として務めた経験のなかで、このときのことは心に生々しく残っている。朝食と昼食のあいだの時間帯、人が木々の名前やビールや目玉焼きのことを考えているとき、(中略) いとも簡単に罪を犯すなどとは思ってみたこともなかった。私はおそらく死ぬまで、法的に言うと、殺人という事実を隠した共犯者のままだろう」。[24] 書き手の主張は単純だ。植民地へのパターナルな治安や統治は、それが善良な心で始められたにせよ、容易に暴力行為に走ることを訴える点にある。ただ、そのことを主張するのに、同僚の理不尽な暴力を止めることも、告発することもしなかった「私」の共犯を通して描いているところに、注意を払うべきかもしれない。ここにも、オーウェルが問題にした書き手の位置は強く意識されているからだ。マリスは何も言わないことで、帝国主義に暗黙裡に加担する位置について書いている。何もしない、何も言わない政治的無気力が構造を補強するのならば、いっそこのエッセイを書くことで「世界のプロセス」に介入できるかもしれない。このエッセイは、オーウェルの問題を継承しつつ、「鯨の外へ」出るための試みでもあった。

6．モダニズムの2つの局面

ニューレフトはモダニストであった。そう言ってしまうと、モダニズムをどう定義しているのかという厄介な問題に入り込んでしまうが、ニューレフトは大雑把な定義しか与えてくれていない。ウィリアムズは言う。「メトロポリスという常に変わってゆく文化環境の動向を芸術家や知識人が感じ取りながら、彼らがどこに身を置くのか、その新しく個別的な位置取り（ロケーション）こそが、モダニズムであった」と。[25] 経済的には繁栄し、旧帝国領から多くの移民を受け入れた50年代、カリブ出身のホール、パキスタン出身のタリク・アリ、カナダ出身のチャールズ・テイラーらがイギリスのメトロポリスに集まっていた。また、かつてのウィリアムズやホガートのような労働者階級出身の「スカラシップ・ボーイズ」もいた。さらに、『コンヴィクション』で見たように、外交官や統治領での治安警察の職を辞して、戻ってきたエリートたちもいた。このように、移動が不可避の現代社会にあって、バックグラウンドが違う者同士がコミュニケーションを取るには、融通無碍なコミュニケーション・スタイルが必要であった。あるいは、ウィリアムズ流に言い直すと、コミュニケーション上のコンヴェンション（一時的な合意という意味だが）をたえず作り変え

[23] *Conviction*, p. 172.
[24] *Conviction*, pp. 172-3.
[25] Raymond Williams, *The Politics of Modernism* (London: Verso, 1989), p. 44.

てゆかねばならなかった。これが、ウィリアムズの言うモダニズムの第1局面である。

それは当然の帰結として、そして20年代のモダニズムと同じように、コミュニケーション媒体（その際たるものは、ことばであるが）への極端な関心を生み出した。そのとき、モダニズムは第2局面に入る。この局面にあって、記号論やナラトロジー、マルクス構造主義といった理論が登場する。コミュニケーションの実践よりそのシステムを重視する理論は、モダニズム第1局面の不安定なコミュニケーションを抽象化し、固定化する。そして、記号それ自体がそもそも不安定であることを強調し、語るという文化実践をテクスト内の虚構化装置に変換した。ひいては、ウィリアムズの皮肉な言い方を真似るが、コミュニケーションなど不可能だということを、恣意的に文学テクストを引っ張り出しては伝達し合う矛盾に満ちた活動を生み出すことになった。[26] 振り返ってみても、20年代、30年代のモダニストには伝達媒体それ自体への関心と伝達の主体であることへの関心と2つの関心があった。同じことは50年代のモダニスト、ニューレフトにも言えるだろう。ニューレフト第1世代と第2世代との確執に明らかなように、その2つの関心は時代とともに分裂してゆく。「カルチャリスト」と呼ばれた第1世代が、オーウェルを念頭に書き手（ライター）の位置取りに拘ったのにたいして、第2世代の構造主義者は、書く行為を通して人が構造媒体（エージェント）になるプロセスを強調した。モダニズムとともに発展してきた文学研究も、こうした過程と無関係ではないはずだ。その視点で見直したとき、少なくともこう言えるかもしれない。ニューレフトが考えたモダニズムの2つの局面を踏まえた上でポストモダニズムを考えないかぎり、文学がもう一度、何らかのかたちで国際政治に関わることは難しいだろうと。

[26] *The Politics of Modernism*, p. 130.